



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第48号

きみと創った「広場」のこと

モーツァルトへの手紙 (その24)



会員番号 K.618 加藤 明

『人間には早すぎる死か、遅すぎる死しかない』
山田風太郎

モーツァルトよ、残念ながら今年の夏も恒例の「サマーコンサート」(第24回)の中止を余儀なくされました。

我々実行役にとっては憎きコロナウイルスに成すすべもなく、その敗北感たるや筆舌に尽くしがたいものがあります。あなたの時代にもあまたの感染症が今日以上に幅を利かせていたのですから、この悔しい思いは充分にお分かりいただけるかと存じますが・・・。

ですから、あなたの弦楽四重奏曲チクルスは、次のハイドンセット第5番(k.464)で中断したままなのです。

しかし、悪いことばかりではありません。

こんな非常事態が続く中で、いよいよあなたの数々の名曲が冴え冴えと聞こえるようになり、しっかりと体内深く入り込むようになったからです！

とりわけ、ピアノソナタやヴァイオリンソナタといった、あなたが描く色彩に富んだ絵画のデッサンを思わせる、素朴さの中に刻まれた感と情の綾取り豊かな作品群に思わず我を忘れてしまい、しばし聴き入ることが多くなったのですから・・・。



以前にも何度か書かせて頂いたのですが、



「モーツァルト広場」はその創設の動機が至ってわがままというか、恥ずかしいほど無知で恣意的なものでした。

長いこと「ああ、ナマのモーツァルトが聴きたいなあ・・・」と切望してきた小生が1995年(平成7年)12月5日(モーツァルトの命日)に開催に漕ぎ着けたアニバーサリーコンサートを嚆矢としています(ですから、今年の12月に予定しているアニバーサリーコンサートは27回目ということになりますね)。

- ・それはそうと、いったい演奏してくれる人はどこにいるのか？
- ・モーツァルトだけにこだわって演奏することができるものなの？
- ・ところで、演奏者のギャラはいくらくらい掛かるものなのか・・・？
- ・果たして「この指とまれ！」の掛け声だけで人は集まるものだろうか？
- ・そもそもこの秋田でモーツァルトをナマで聴く「会」は他にないのだろうか？

いまだから言えるこんな世間知らずの手探り状態で、決まっているのは演奏会場が小生の勤める「彌高会館」(現イヤタカ)ということ、もうひとつは司会進行役で、現在まで一度も欠くことなく担ってくれている岡田卓子さん、という二つのことだけでした。

1994年（平成6年）春に多くの県民の注目を集め、「秋田港 ポートタワーセリオン」がオープンしました。

そのオープンに際し、小生が勤めるイヤタカが一階の北口に【キャプテンクック】という名のファミリータイプのレストランを開設することになります。

秋田港を意識した巨大な水槽を正面に設え、数種類の魚やエビなどを観賞用に放すなどの非日常性を醸し、開業当初は結構な評判をとったものでした。

このイタリアン風を意識した【キャプテンクック】、港を意識した魚介料理はもとより洒落た肉料理が豊富な自慢の店でした。

このお肉の仕入れ先「一力」という精肉屋さんと本格的に取引が始まったのはこの店のオープンからと記憶しています。

この時の「一力」の営業担当として、稀に見る巨体を揺らしながらニコニコと小生の前に現れたのが、後に「モーツァルト広場」創設にその力量を遺憾無く発揮してくれた堀井淳司氏（通称淳ちゃん）その人でした。

何度か仕事のことでおつきあいを進めるうちに、淳ちゃんが自らチェロを弾く音楽人間であることが人づてにわかると、仕事のことはそこのけで、様々な音楽論で盛り上がり、自然に仲間意識が芽生え醸成されていきました。

それからは急速に音楽に関わる話題を通じて親交が深まり、彼が市内のアマチュアオーケストラに所属していることから、小生にも言わば「秋田のアマチュア音楽事情」が次第にもたらされることになりました。

そんなある日、『モーツァルトをナマで聴く機会をつくりたいんだけどなあ？・・・』と反応をうかがう小生に、『へえ・・・、そうですか・・・、何人かはすぐ演奏できる仲間がいますよ・・・』と、その可能性をちらつかせてくれた淳ちゃんの眼は悪戯っぽくもそれまで見せたことのない輝きに満ちていました。

『（ミニ演奏会）やるならいろいろ協力しますよ！』。

彼のこの一言がどれほど小生を励ましてくれ

たことか、いまでも思い起こすことがしばしばです。

そう、その悪戯っぽい瞳と流れ落ちる汗を拭うしぐさと共に・・・。

こうして、淳ちゃんが背中を押してくれたことで、一気に小生の無知なる夢が現実のものになるようで、異様な興奮のなかで期待が膨らみました。



こうして、淳ちゃんとの出会いから1年半後、やっとのことで記念すべき第1回のアニバーサリーコンサートが開催されることになりました。

もちろん、プログラムと演奏スタッフは淳ちゃんとその仲間の皆さんに殆どお任せ、というカタチでの初興行でした。

わずか20名の出席者でしたが、こちらの実行役も招かれた客人もお互いに初体験イベント、とても新鮮かつワクワク感いっぱい、今こうして振り返ってもまばゆいほどの会場の雰囲気でした。

演奏曲は殆どが弦楽四重奏曲の部分楽章やファゴットを使った管楽の断片的な演奏でしたが、楽器をナマで聴く機会がなかった初体験の出席者がほとんどでしたので、大変興味深げに眼をくりくりさせながら視聴していたものです。

壇上で演奏前にチェロを手にした淳ちゃんが『皆さん、この楽器は何でしょう？』と笑顔で問いかけ、一瞬の間隙を縫うように『はい、これは大きなヴァイオリンです！』とお道化たシーンが脳裡に焼き付いています。

こうした笑いをとりながらも、実に真剣に「アイネ・クライネ」を弦楽四重奏版で演奏してくれ、その美しさに全員が酔いしれるという予想以上に素敵なアニバーサリーとなったのでした（皆々初めてモーツァルトの凄さが感じられた時間でした）。

この忘れがたい初めての「命日コンサート」が開催できたのは、ひとえに音楽愛好家にしてアマチュアチェリストの淳ちゃんと、現在に至るまで一貫してコンサートの司会役を担ってく

れている岡田卓子さん、お二人の献身的なご尽力のおかげでした（ところで資料を視たら、今日も毎回ご登場頂いているヴァイオリンの北嶋奏子さんだけがこの第一回から出演されていることが判りました。また、この第一回からご出席、今日まで会員としてその名を連ねていらっしゃる方は友人の清水俊明さんお一人だけでした。）



こうして振り返ると、淳ちゃんのしたたかな音楽愛のおかげで船出した「モーツァルト広場」ですが、縁あって屈指のモーツァルティアーナ久元祐子さんを招聘することで大きく成長進化を実現できたことは周知の通りです。

この間も淳ちゃんには幹事会等で運営の方向性について意見をいただき、変わらぬご支援に浴してきました。



久元祐子さんを初めて招いた第3回サマーコンサートでの記念写真（右が堀井淳司氏） 1999.7.21



「ジュノム」を弾く久元祐子さん（指揮 北嶋智仁氏）

久元祐子さんが初めて秋田に来られたころ、「モーツァルト広場」は各自がモーツァルトのお好きな曲のk.番号（ケッヘル番号）を選び、そのk.番号で会員の登録をする、という新たな制度を採用しました。

このとき、『どうするの?』という問いかけに、淳ちゃんは迷うことなく即決で『リンツ（交響曲k.425）!!』と満面の笑みで小生に訴えるように応えました。

『俺、リンツを聴くと元気であるんだよ・・・大好きな一曲だから・・・』

偶然ですが、モーツァルトがウィーンで独立して間もなく作曲された深刺たるこの名曲には、小生も浅からぬ思い入れがありました。

それだけに、淳ちゃんのこの曲の選択にはちょっとした嫉妬（!）を感じつつも『さすがだなあ・・・』と、妙に感動的な喜びを感じたものでした。



そんな淳ちゃんが、半年前の5月に、忽然と天国に召されたのです。

訃報に接し、ここ2年ほどは音信も途絶えていただけに、驚きと共にこちらから連絡もせず、疎遠になっていたことに対する口惜しい感慨がしばらく小生を支配し、苦しめました。

そして、『水臭いなあ、淳ちゃん・・・なんで!?』、と叫びたい思いがふつふつと込み上げたものでした。

振り返ると、人並外れた音楽への熱意と強烈な演奏へのこだわりを持ち続け、多くの仲間を牽引してきた淳ちゃんは、その反面、自らのビジネスに関することやプライベートについては多くを語らないというところがありました。

そのことが、不意なる昇天を一層鮮明にしているのかもしれませんが、彼が残した音楽愛を貫く強烈な姿勢を多くの楽友や「広場」の会員が、あの屈託のない笑顔と共に永く偲んでいくことでしよう。

本稿のクロージングとして、あらためて淳ちゃんの熱くも柔らかなチェロの響きを思い起こしつつ、心からご冥福をお祈りする心境でおります。

淳ちゃんが大好きだったモーツァルトが、フリーメイソンの仲間の訃報に際して書き送ったあの清澄なる「フリーメイソンの葬送音楽」（k.477）をワルター盤で聴きながら・・・。

end

東山魁夷とモーツァルトの音楽（上）

会員番号 K.203 松田至弘

随分昔のことになるが、「ルターとその時代」を探訪する旅に当たって、東山魁夷画伯（1908～1999）の著書『ドイツ紀行—馬車よ、ゆっくり走れ—』（新潮社）を参考にさせていただいたことがあった。

具体的に言えば、ルターの宗教改革と関連するアイゼナハ、エアフルト、ヴィツテンベルク、ニュルンベルク、ヴォルムスの各町を訪ね歩こうとしたのだが、ヴォルムスについての資料が不足していた。

ヴォルムスは、神聖ローマ皇帝カール5世が帝国議会を開いてルターを召喚し、改革の所説の撤回を求めたところであり、また、審問を受けたルターがそれに対して「否」を突きつけたところである。つまり、ドイツ宗教改革の重要な舞台となった町なのである。

しかし日本では、このことはほとんど知られておらず、ここを訪れる日本人もわずかしかないというのが実情であった。

そんな折、書店で偶然に出会ったのが、上記の本『ドイツ紀行—馬車よ、ゆっくり走れ—』であった。同じ著者の『オーストリア紀行—馬車よ、ゆっくり走れ—』（新潮社）と並んで書棚に並べられていたのである。

『ドイツ紀行』の方を手にとって開いてみると、ニュルンベルクとヴォルムスについての叙述があったので、私はその文章を読んでみよう

と思い、即購入した。そして、『オーストリア紀行』もサブ・タイトルが同じなので、機会があったら読もうと思い、一緒に購入したのである。

以上が、東山魁夷の著書に私が出会った経緯である。

しかし私は、『オーストリア紀行—馬車よ、ゆっくり走れ—』の方は、自分の本棚の奥に押し込めてしまい、そのまま放置することになった。

この本のなかに、「ザルツブルク紀行」と「モーツァルトとの邂逅」が含まれていて、東山魁夷がモーツァルト音楽の熱烈な愛好家であることを知ったのは、私が「モーツァルト広場」の会員になってからのことであった。

それから私は、東山魁夷に関する文献を集め、時間を割いて少しずつ読むようにしてきたのである。

*

ところで私は、2019（令和元）年6月に信州旅行にでかけた。そして、北陸新幹線で大宮駅から長野駅に向かう途中、インターネット検索をしていて、長野市の善光寺の近くに長野県信濃美術館（現・長野県立美術館）に併設して東山魁夷館があることを知った。

「しめた！ やっと東山魁夷画伯の本物の作品が見れる」と内心喜んだが、残念ながら東山魁

夷館は改装中であり、リニューアルオープン展は2019年10月5日～12月3日までと予告されていた。

その予定された展示品の目玉は、「緑響く」であった。これこそ、モーツァルト音楽の影響を色濃く受けた作品なのだ。

以来私は、この記念展示会のこと気がななつてしょうがなかった。そして、意を決して11月28日に再度長野市に足をはこんだ。台風19号による豪雨で千曲川が決壊し、大きな被害が出た一か月後であり気が引けた。

長野駅の東側に位置する操車場と新幹線車両が水につかり、その悲惨な様子が何回もテレビで放映されていたので、私はそれを見て、長野市全体がまだまだ復旧していないだろうと思ったのである。

だが、予想に反して、長野駅の西側はあまり被害の様子を感じさせなかった。

長野駅から中央通りに出てまっすぐ進むと、有名な善光寺がある。その境内を右手方向に入ると、城山公園内に長野県信濃美術館があり、隣接して東山魁夷館が併設されていた。ここまで行くには、バスを使うこともできるが、歩い



東山魁夷館の外観

て疲れるほどの距離ではないように思う。

途中数か所で、リニューアルオープンのポスターを目にしたが、東山魁夷館の入口近くには「魁夷再会」の文字と代表的作品「緑響く」を配した大きな立て看板が設置されていた。



東山魁夷館リニューアルオープン記念展の立て看板

東山魁夷館は、長野県に画伯から寄贈された作品をもとに1990（平成2）年に設置されたようであるが、収蔵作品は現在、スケッチや習作なども含めると約950点を超えるという。東山魁夷作品の最大のコレクションが、ここにあると言っていいであろう。

リニューアルされたばかりのしゃれた建物に入ると、展示室に向かう入口のところに大きなパネル写真が飾られていた。

一本の舗装された道路に立って遠方を眺める東山魁夷の後ろ姿がそこにあり、幸いそこまで

は撮影が許可されていたので、私は急いでそれをカメラに収めた。



道路に立ち遠方を眺める東山魁夷画伯

この写真パネルを見て、私がすぐ思い浮かべたのは、東山魁夷が青森県の種差海岸近くで描いた二度のスケッチをもとに、1950（昭和25）年に制作した「道」という作品である。

それから30年後に、東山魁夷は同じ場所を訪れたというが、かつて見た道は舗装されて全く変わっていたというエピソードが残されている。

この写真が、その時に写されたものであるかどうかはわからない。しかし、「道」という作品を思い浮かべながら見てみると、いろいろ考えさせられるところがあり興味深い。

「道」は、初期の代表作のひとつとされているが、東山魁夷はこの作品により風景画家として広く認められることになったのである。この作品は、東京国立近代美術館が所蔵している。

*

ところで、私は展示室で、「花明り」、「春雪」、「緑響く」、「光昏」、「行く秋」、「紅葉の谷」、「夕静寂」、「静映」などを見て、その素晴

らしさに深い感動を覚えた。

だが、そのなかで特別に私が引きつけられたのは、「緑響く」であった。最初、1972（昭和47）年に描かれたが不明になり、10年後の1982（昭和57）年に再度制作されたものだという。絵の大きさは84.0×116.0cmであった。

信州の蓼科高原にある御射鹿池で行ったスケッチをもとに制作されたこの作品は、極めて幻想的である。抒情的とも言える。

東山魁夷によれば1972年のある日、その年に描く作品の構想を考えていた時、モーツァルトの「ピアノ協奏曲第23番イ長調（K.488）」第2楽章の美しい旋律が思い浮かんだという。

すると、一頭の白い馬が針葉樹の繁る青緑色の湖のほとりに小さく姿を見せ、ゆっくりためらいながら歩いて消えていくのを感じたというのだ。白い馬はピアノの旋律で主題を示し、針葉樹の森は協奏するオーケストラで背景としての役割を担っているという。

この幻想から生み出された構図と御射鹿池の風景を重ねて、代表作のひとつ「緑響く」は誕生したと言えよう。

東山魁夷は更に、1972年に限って、その年に描いた18点全部の風景画（習作を含む）にも、白い馬が現れたと述べている。それが、連作「白い馬の見える風景」である。

興奮さめやらぬなか、この作品から離れ窓から外を見ると、夕闇が迫っていた。「白い馬は一体何を意味しているのでしょうか？」心にそう問いながら、また歩いて長野駅の近くのホテルに急いだ。

酒とモツの日々 (48)

会員番号 K.488 佐藤 滋

多難な2022年がようやく終わろうとしています。平成は「天災の時代」とよく言われますが、ひょっとすると令和は「人災の時代」と言われるようになるかもしれません。突然攻めてくる隣国、突然機能しなくなるATMや携帯電話、情報の漏洩や拡散、ネット上の誹謗中傷、新興宗教による家庭崩壊・破産、手抜き検査や杜撰工事、詐欺に賄賂に幼児虐待、銃乱射……。なかでも元総理の暗殺事件はショックでした。

暗殺といえばモーツァルトの暗殺説もいまだに拡散しています。サリエリや身内による毒殺説、フリーメーソンを危険思想とする体制側が広告塔であるモーツァルトを排除したとする説。いやいやフリーメーソン自体が「魔笛」で秘密を暴露されたことを怒り、見せしめに会員であるモーツァルトを謀殺したとする説云々。今となっては何が秘密なのかわかりませんが、ささいなことでも組織防衛の為には手段を選ばないのは今も昔も同じこと。天才の感性というものは時折、組織の意向と噛み合わないものですが、先日バッハの「マタイ受難曲」を聴いて、少し考えることがありました。この曲はイエス・キリストが十字架に架けられて亡くなるまでを描いた長大な曲です。全ては、イエスの

十字架上の言葉「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」（主よ、主よ、なぜ私をお見捨てになったのですか）に向かってドラマが緊張をはらんでゆきます。

私がキリスト教は凄いと勝手に思っているのはイエスほどの人が、死を前にして心を乱している、恐れている、嘆いている、その人間臭さ、私たちの弱さを投影している描写です。それに対し、いかがわしい新興宗教では教祖様は超越された方であり、信者との間に多くの階層が用意されています。その階層を登るためには莫大なお布施を積まなくてはなりません。バッハやモーツァルトが生きていた時代にはキリスト教会という「組織」も似たような過ちを犯していました。

さて聖書では、この十字架上の言葉について「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた」（マタイ伝27章46節）と書いてありますが、バッハの楽譜を見ると、イエス役であるバス歌手には何とも歌いづらい音域で書いてあり、とても大きな声では叫べないようになっている。バッハの感性が、聖書とは噛み合わない解釈を求めている。教会も組織ですから、これは聖書の記述に反している、と批判があったに違いありません。でも、おおごとにならなかつたのはバッハ

の周到さ（楽譜にはpともfとも書いていない等）とバッハ自身が当時有名ではなかったからでしょう。有名な人が信念をもって行動する時、必ず愚者は嫉妬し攻撃するものです。最悪の姿は暗殺ですが、それは今日某大統領の常套手段でもあります。

文明・文化を破壊するのは人間ですが、それを記録し、自戒し、再建し、創造してゆくのも人間です。同じ過ちを繰り返さないのが、歴史を学ぶことの気づきとするなら、過去からの学びと同様に今をどう記録し伝えてゆくかも大切な使命でしょう。仮にモーツァルトが愚者に

よって暗殺されていたとしても、彼の作品を230年後の極東日本の田舎で楽しむことが出来るのは、無数の人間の、無限の文化活動の継続のおかげです。

天災も人災もこれから続いてゆくのでしょうか。私たちに出来ることは殆どありませんが無ではありません。災いを恐れ、案じ、祈り、助け合い、励まし合うこと、その無限の連なりが、地球の傷を癒やし、人類の未来を育ててゆくのだと思います。2023年が、そんな未来へのたゆまぬ一歩となりますように。

事務局より

本年9月にグランドオープンした『あきた芸術劇場ミルハス』にみなさんは足を運ばれましたでしょうか。私はタイミングよく大ホールにての演奏（母校記念式典にて）、ならびに中ホールにて講演会をさせていただきどちらの“舞台”も体感することができました。秋田県民会館、秋田市文化会館、アトリオン音楽ホールなど県内各地のホールで演奏したことはありますが、それとは全く違う光景と音を実感。特に大ホールでの演奏について一言で言えば『圧巻』。これだけの広さと

高さを感じたのは初めてです（他県のホールでは珍しいことではないかもしれませんが）、新しい秋田の音を感じ聴くことができます。近く大ホールの観客席で音楽を堪能する機会もあるのでそれも楽しみ。『あきた芸術劇場ミルハス』ではこれからも多くのアーティスト、楽団のコンサートなどが開かれるでしょう、ぜひ『圧巻』をご自身の肌で感じてみてください。ミルハスの大ホールでモーツァルト聴けたら最高だろうな。（K575）

「モーツァルト広場」ではいつでも会員を募っております（R4年12月現在75名） [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）ご紹介下されば幸いです。

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田（事務局）080(1673)8322